

く思はなくなつて死ぬるものだ。

僕の精神に異常を來したとすれば此の時だと僕は思ふ。

夕めしを女中が持つて來るまでに、僕はも一度手拭ひを提げて湯殿に降りた。

それから上つて來てすつかり逆上したのだ。

氷の上を迂る風のような悲哀が僕の胸に押し寄せた。

弟の目は恨し氣だつた。

僕が上京する時、高濱まで一緒の船で來て僕は一言もかはさないで別れた。

それから『自分には希望がないので今年の四月からK小學校の先生になつた』と一度葉書を寄

こしたきり、僕は國の方とは長らく音信不通だつたから、

靈魂は不滅だと僕の靈魂は信じる。

弟の悶絶した聲が空中に消えて行く。

僕は三百里も遠くに居て、其の聲を聞き得たと思つた。

海を越え山を越えて、もがき苦しみなから送電して來る。